

第12回土浦の花火フォトコンテスト 総評

今年も全国から大変多くの皆さまに作品をご応募いただき、誠にありがとうございました。例年と比べると応募者数はやや減少したものの、今年も非常に見応えのある作品群に出会うことができました。応募者数に関しては、花火競技大会において安全面への配慮が強化され、撮影場所の確保がより難しくなっていることや、SNSを通じた発信など、写真表現を取り巻く環境そのものの変化も背景にあると感じました。

しかしながら、応募作品のレベルは例年通りで、特に受賞作品はどれも完成度が高く、花火写真の魅力を多角的に伝えてくれるものばかりでした。どの作品からも撮影者の工夫や努力が感じられ、審査員一同、選出には大変苦勞しました。特に上位入賞作品は、場所や天候など現場の条件を踏まえ、いつも以上に「土浦の花火大会」をどう表現するか、にこだわった写真が多く見受けられました。

受賞作について、まず最優秀賞「歓声の上に咲く」（高橋維杜さん・東京都）は、初参加での受賞という快挙でした。土浦らしい風景を求めて時間をかけてロケーションハンティングを行ったとのことで、その努力が見事に結実した作品です。大会のスケールや観客の熱気までも感じさせる構図が印象的でした。続く優秀賞や入選作品も、それぞれに当日の撮影場所や光、風の条件を巧みに生かし、その瞬間でしか成立しない情景を見事に捉えた作品が多かったです。こうした作品と皆さまから寄せられた撮影エピソードからは、花火撮影における事前準備と現場での判断力の重要性が、よく伝わってきました。

一方で、応募作品全体については、10号玉、特に多重心を主題にした作品が年々減少している点は、やや寂しく感じられました。多重心は花火師が高度な技術を駆使して制作する非常に見応えのある花火です。その繊細な輝きを写真として記録することは難しいものの、だからこそ挑戦する価値があります。来年はぜひ、その魅力を的確に捉えた作品に出会えることを期待しています。また、ワイドスターメインや創造花火も土浦大会ならではのプログラムであり、会場のスケール感や花火の高度な技術を表現できる題材です。ぜひ独自の視点で作品化していただければと思います。

時代が変化しても、土浦の花火大会は人々の心を惹きつけ続けます。そして、その感動を伝える役割を担うのが写真です。12回目となるこのフォトコンテストの作品が、土浦の花火大会の魅力を広く伝える、ひとつの大きな力になっていると感じています。来年も多くの力作のご応募をお待ちしております。

写真家・土浦の花火大会フォトコンテスト審査員 松本美枝子